

生涯音楽学習指導者の新たな役割

- 教えるから、結ぶへ -

聖徳大学 八木正一

この場には、生涯学習音楽指導員の資格をお持ちの方や、生涯音楽学習の指導にかかわっておられる方が多くお集まりだと思います。私の方からは、これまでの生涯音楽学習の歴史を簡単に振り返りつつ、生涯音楽学習の指導者の役割の変化についてお話してみたいと思っております。それを端的に言えば、指導することから結びつなくことへの、指導者の役割の変化ということになります。

まず生涯音楽学習の歴史を簡単に復習しておきましょう。

1960年から本格化した日本のめざましい経済復興は、1968年には日本をGNP(国民総生産)世界第2位の経済大国に押し上げました。こうした状況をも反映して、そろばん、習字、ピアノを中心とした子どもたちの学校外の習い事は急速に増えていくこととなりました。また、70年代になると大都市を中心に、民間の学習機関であるカルチャーセンターなどが開設されるようになり、成人を中心とした学習者が多く見られるようになっていきました。

ご承知のようにポール・ラングラン(Paul Lengrand)という人がユネスコで「life-long integrated education」=「生涯教育」という考え方を提唱したのは1965年(昭和40年)でした。人間は一生学び続ける権利をもっているという考え方は日本にも紹介され注目を集めることとなりました。その後、昭和62年(1987年)の臨時教育審議会答申(教育改革に関する第4次答申)において、生涯教育は生涯学習という言葉に改められ、以後、生涯学習として定着していくこととなりました。

このような動きをいっそう加速させたのは、1990年(平成2年)の、いわゆる生涯学習振興法の制定でした。これによって、生涯学習という考え方が一気に定着することとなり、公民館や生涯学習センターなどの地域の社会教育施設も充実していくこととなりました。この背景には、休2日制の定着による時間的余裕の増加という点も見逃すことはできないと思われます。

このことを、生涯学習の場としてもっとも身近な公民館の利用者の数で見てください。文科省の統計によりますと、1978年(昭和53年)に、8600万人だった公民館の年間の利用者は、生涯学習振興法以降の1993年(平成5年)には、1億8400万人と倍増しています。現在では1億6000万人とやや減少傾向にあります。公民館だけでなく、地域の文化施設、学校などなどにおいて、何らかの学習活動に関わる人たちは、高い水準で定着してきているということが出来ます。

このような歴史をもつ生涯学習ですが、とりわけ音楽に関して言えば、音楽文化の振興のための学習環境の整備等に関する法律（いわゆる音楽振興法）が、1994年平成6年11月公布されたことを忘れるわけにはいきません。

この法律の冒頭には、趣旨が次のように書かれています。

「音楽文化が明るく豊かな国民生活の形成並びに国際相互理解及び国際文化交流の促進に大きく資することにかんがみ、生涯学習の一環としての音楽学習に係る環境の整備に関する施策の基本等について定めることにより、我が国の音楽文化の振興を図り、もって世界文化の進歩及び国際平和に寄与することであること」

つまり、この法律は音楽文化の重要性と生涯音楽学習の環境整備を謳った理念法ということになります。

この法律の趣旨をふまえ、生涯音楽学習の普及に取り組んできたのが、本日のフォーラムの共催者でもあります公益財団法人音楽文化創造です。本財団は、平成8年（1996年）4月に設立され、法律に謳われた音楽学習の環境整備と音楽を通じた相互理解の促進に向け様々な活動を行ってきました。

さらには、2001年平成13年12月に文化芸術振興基本法が制定され、「文化芸術の役割が今後においても変わることなく、心豊かな活力ある社会の形成にとって極めて重要な意義を持ち続ける」と高らかに宣言されました。これによって、音楽にかかわる生涯学習がさらに拡がりを見せるようになりました。

こうした歴史の中で、生涯に亘って音楽を学ぶという文化が定着してきたことができます。私は生涯音楽学習を「音楽の学びを通して、一生にわたって自己をみがき、私たちの社会や地域に積極的に働きかけ、そのことによって自己の価値観や能力を不断に紡ぎなおす営み」ととらえています。

さて、今も述べましたように、1990年以降、生涯音楽学習として音楽を学ぶ人々は飛躍的に増えて行くことになりました。

したがって、生涯音楽学習にかかわる指導員の仕事の中心は、まずは生涯に亘って音楽を学ぶ人たちを「教える」「指導する」ということにありました。したがって、その指導者に要請されたのは、その学びをどうつくるのか、つまり、どのように学びを支援していくのかという指導に関する資質であったということが出来ます。

もちろん、そのような基本的な役割は今後も維持されていきます。しかし一方で、その役割は次第に変化しつつあるのではないかと私は考えています。

なぜでしょうか。それは、生涯音楽学習のあり方が、音楽を単に学ぶということから、自分たちで音楽活動をつくりだし、他の人々とそれを通してつながっていくといったあり方に次第に変化しているのではないかと考えるからです。

実際に河合楽器のレポートによりますと、大人の音楽学習者は、2008年のリーマンショック以降明らかに伸び悩んでいるとされています。つまり、たとえば大人のピアノ講座といったような形で、単純に音楽を学ぶという人たちは相対的に少なくなってきたということをこのレポートは示していると言わなければなりません。

それに対して、さまざまな音楽イベントなどを通して、音楽を媒介にしてつながろうとする人々の動きは明らかに増えてきていると言えます。このように考えますと、さまざまな音楽活動をどうつなぎ、そこからまた新しい動きをどうつくっていくかという、いわばコーディネーターとしての役割が生涯音楽学習の指導員に問われるようになっていくと考えざるをえません。つまり、音楽にかかわる人々を結び、つなぐ仕事が生涯音楽学習の指導員に期待されるようになり、そのような仕事を遂行する能力が要請されることになっているのではないかと思います。

それは具体的には、地域の人々に音楽の楽しさや感動を体験できる機会を創ったり、音楽の専門家や地域の住民さまざまな機関などとの連携をつくり出すことによって地域の文化振興を推進したり、音楽に関する多様なイベントを企画したりできる能力を指しています。

バブルの時期に作られたいわゆる箱ものは、老朽化が目立つようになってきました。立て替えの機運や、そこでどのような生涯音楽学習を新たに組織するかが問われるようになってきています。昨年までのこのフォーラムにおいても、こうした問題をシンポジウムで追究してきました。その中で、文化振興財団などを運営する団体や地方自治体は、地域の住民を音楽でつなぐようなイベントなどのアイデアを提供してほしいと考えていることがわかってきました。たとえば、そうした財団や自治体にアイデアを提供し、地域住民の音楽活動をつなぐような活動を組織する役割が、具体的に生涯音楽学習にかかわる指導員に問われ始めてきているのです。

こうした生涯音楽学習指導者の役割の変化ということにも関連して、私たちの音楽行動の変化という点について考えてみましょう。

私たち団塊の世代の音楽行動は、コンサートに足を運ぶことはもちろんありましたが、やはりレコードやCDを買って音楽を聞くといったことが中心でした。ですから、音楽好きな人たちは、その結果としてレコードやCDを集めることを楽しみにしてきました。レコードやCDを集めるといった行動はモノ主義だということができます。

では最近はどうでしょう。CDを買う行動はかなり少なくなりました。CDを買うのは、握手ができるとかアイドルの選挙ができるからといった付加価値のある場合が多くなっています。音楽を聴くスタイルは、ネットから自分の好きな音楽をダウンロードするといった形に変化してきています。CDを集めるといったことはほとんどなくなってきました。

その代わりに増えているのが、いわゆるフェスの流行です。集まって何らかの音楽体験を楽しむというのがフェスです。つまり、音楽行動がモノから体験へ、つまり、モノからコトへと変化しているのです。

音楽に関しても最近ではさまざまなアプリが創られています。自分で単旋律だけを創って発信すると、他の人が伴奏をつけてくれたり、編曲をしたり、バックの絵を創ってくれたりして、みんながつながっていくという人気のアプリがあるそうです。まさに、人とつながりたい、そして単純につながるのでなく、それぞれが主人公になって、それぞれが自分の役割をもってつながりたいという人々の思いが、このアプリの人気を支えているといわなければなりません。

こうした状況は、他の人と音楽を通してつながる体験を重視する、コトとしての音楽活動に人々の関心が向いてきたということを物語っています。このような音楽行動の変化は、生涯音楽学習の指導にかかわる人に、コトとしての音楽体験を創り出し、人々をつなぐ役割を期待することになります。

さて、そうした音楽活動をつくる仕事を行うには、ボランティアな意識をもつことが重要になるとも私は思っています。最後に、やや大げさですが、日本近代の歴史をさかのぼりながらこの点について考えてみましょう。

近代日本の歴史は明治に始まります。明治5年には学制が発布され、教育の面でも急速な近代化に取り組むこととなりました。明治5年の学制序文(学事奨励に関する被仰出書)の冒頭では、なぜ、学校で学ぶのか、つまり近代学校教育の目的が簡潔に書かれています。ごくごく粗く言いますと、それは、自らの立身出世のためだということになります。じつにわかりやすい目的だと言うこともできます。

こうした目的のもと、貧しくとも勉学に励み、立派な人間になってふるさとに錦を飾るという生き方が、明治以降日本人のモデルになっていきました。文部省唱歌「ふるさと」では、「志を果たしていつの日にか帰らん、山はあおき故郷、水は清き故郷」とうたわれます。今はつらいが、故郷に錦をかざることができるようがんばろうという気持ちで、多くの人々ががんばったはずです。そんな多くの人たちの力でわが国の近代＝西洋にいつけ追い越せといった歴史が切り開かれていきました。

これは戦後も基本的に同じであったとすることができます。

敗戦国日本の戦後の経済成長は、まさに驚異的なものでした。それが本格的に始まったのは1960年だと考えることができます。池田首相はいわゆる所得倍増計画を国民に示し、本格的な経済復興の旗を掲げることになりました。この旗のもと、国民は所得倍増の夢へ向かってがんばりにがんばったわけです。結果、先に述べましたように、わずか8年後の1968年には日本のG N Pは世界第2位に躍り出ることになりました。経済の面で西洋に追いつき追い越したのです。こうした経済成長を背景にして、70年代に入ると、カラーテレビ、冷蔵庫、掃除機、洗濯機などの耐久家電の普及率が90%を超え、ほとんどの家庭に普及していくことになりました。大半の国民が自らを中流と意識する「豊かな」国になったのです。

豊かになるにつれ、世の中には「たのしいこと」が増えはじめます。人々の関心は、将来ではなく、「今がたのしい」ことに向き始めます。こうした中で皮肉にも、今つらくても将来のためにがんばるといった明治以降の生き方モデルは次第に色を失っていくことになりました。

バブル崩壊後そのことはよりいっそうに明確になります。明治以来の、自分の将来のためにがんばり、そのことによって社会の発展を支えようというアイデンティティが失われてきたことをわれわれは意識するようになりました。「豊かさ」と入れ替わるように、近代日本人を支えてきた、今つらくとも将来のためにがんばるといったアイデンティティを失うことになりました。そして、それに代わるアイデンティティを全体として見つけることができずにいるというのが、日本の現状ではないかと私は考えています。

そのような中で、豊かさを背景にしつつも、他人のために汗を流す、つまりボランティアな生き方を自分のアイデンティティにというトレンドが次第に大きくなってきていると私は感じています。その大きな契機となったのが、平成7年(1995年)の阪神淡路大震災だと思われます。兵庫県の統計では、阪神淡路大震災のボランティア推計人数は、発災から1年間で139万人、5年間で216万6千人となっています。これ以降、こうした災害ボランティアは定着をみせるようになっていきます。東日本大震災でも多くの人々が災害復旧にボランティアとして汗を流したことは記憶に新しいところです。

厚生労働省によりますと、現在のボランティア数は約740万人、ボランティア団体数は12万、団体所属ボランティア数は701万人(4.5倍)、個人ボランティアは38万人となっており、これらの数は25年間で5倍から8倍に増加しているとなっています。

欧米の状況からすればまだまだ大きい数とは言えませんが、こうした流れを見るにつけ、自らの成功の追求という明治以降の伝統的な生き方から、他人のために汗を流すことを自らのアイデンティティにするという生き方へと次第に変化しつつのではないかと私は考えています。

何もボランティアは災害ボランティアだけではありません。文化芸術の分野でもボランティアで活動する人は確実に増えています。音楽祭や音楽フェスティバルは、今やボランティアなしには成り立たないという状況も生まれています。

音楽にかかわったボランティアを体験した人たちは、その意味について、たとえば次のように述べています。

- ・自らの好きな音楽にかかわるボランティアによって地域や社会に貢献することを実感できる
- ・そしてそのことにより達成感や充実感をもつことができる
- ・等価値による他人との出会いによって新たな水平的な人間関係を得ることができる
- ・こうしたことによって、自らのアイデンティティを確認することができる

つまり、ボランティアは私たちのアイデンティティ形成に大きく関わっているということが言えます。

誤解のないように申し上げますが、もちろん、私はみなさんに音楽ボランティアをしてほしいと申し上げているわけではありません。ボランティアマインドをもって人と音楽をつなぐ生涯音楽学習にかかわることで、指導員自身が新たなアイデンティティをもてるようになるのではないかと申し上げているわけです。

わが国の教育関連予算は他の先進国と比べるとかなり低いと言われます。このような状況が続いていくかぎり、学校音楽教育は今後も縮小していくと考えなければなりません。それにつれて、学校音楽教育が担っていた部分が徐々に生涯学習として位置づけられていくようになることも想定しておかなければなりません。たとえば、部活動などの指導はもはや学校外の指導員に任せるといった時代がきています。その点では、生涯音楽学習にかかわる指導者への期待は高まっていると言わなければなりません。

こうして考えますと、生涯音楽学習にかかわる指導者には、音楽を生涯に亘って学びたい人に音楽を教えるという役割はもちつつも、地域の音楽活動全般に積極的にコミットしていく機会が増えていくと考えなければなりません。それは学校音楽教育の受け皿になるというだけではありません。先ほどから申し上げていますように、地域の人々や諸機関な

どとの連携を推進しながら音楽による地域の文化振興を推進したり、さまざまな音楽イベントを企画したり、地域の行政機関、音楽団体を結びながら新しい音楽活動をつくり出していったり、といったような役割が増えていくことを意味しています。まさに、音楽と人々を結び、つなぎ、地域文化の創造に寄与していくという、新たな役割が、生涯音楽学習の指導者に期待されるということになると考えなければなりません。

さまざまなシーンで、音楽と人を結び、つなぐ生涯音楽学習の指導者は、大きく言えば、わが国の音楽文化の発展をフロントで担うことになるはずです。そうした活動にボランティアなマインドをもちつつかわって行く中で、きっと、みなさん自身の新しいアイデンティティや生き方の発見があるのではないかと私は強く思っています。

みなさんのご活躍を心から期待をしお話を終わりにさせていただきます。